



# 小田小だより

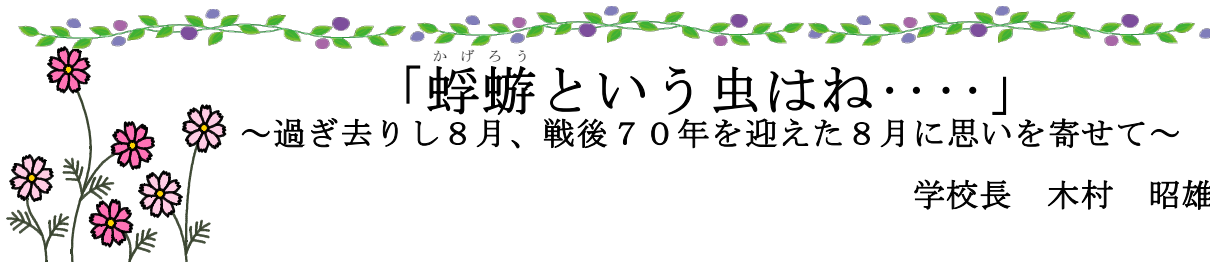
平成27年 9月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号

TEL 045(775)3011

<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

横浜市立小田小学校



かげろう

## 「蜻蛉という虫はね……」

～過ぎ去りし8月、戦後70年を迎えた8月に思いを寄せて～

学校長 木村 昭雄

長い夏休みを終え、にこにこ顔の元気な子どもたちが久しぶりに学校に戻ってきて、今日から前期後半がスタートいたしました。これも保護者、地域の皆様方のご理解とご協力の賜です。ありがとうございます。しばらくは厳しい残暑が予想されますが、9月に入れば確実に秋を迎えます。爽やかな秋に向かって、子どもたちに、ますます笑顔があふれますように教職員一丸となって努力して参ります。

この夏休みに、書斎の本棚で埃をかぶっていた吉野弘の詩集を何げなく手に取りました。学生時代に好んで読んだ詩人です（学校便りの平成25年度3月号「あれは嘘ではない。愛なのだ！」の巻頭言に吉野弘の詩「夕焼け」を紹介したことがあります）。当時は気にもしなかった詩の一節に目が留まり、しばし沈黙考いたしました。

蜻蛉（かげろう）という虫はね。生まれてから二・三日で死ぬんだそうだが、それなら一体何のために世の中へ出てくるのか。

『消息』 I was born. より

「生まれる」とは英語で‘I was born（私は生まれさせられた）’と受身形で書きます。吉野弘はこのことに気づき一編の散文詩にしたのです。私は、この後に‘by Good（神によって）’が省略されているから受け身になっているのだと教えられたことがあります。中学校の教員をしていたときに、親に反抗する子どもが「誰が産んでくれと頼んだ！」という台詞をよく耳にすることがありました。そう言う子どもに頭ごなしに叱りつけてもはじまりません。

そんなとき、私は「君は神様からご両親にあずけられた存在だよ。日本語で子どもを〈授かる〉というのではないか。神の摂理でこの世に生を受けたのだから、君は自分を大切にしなければ神様に叱られるぞ」と説いてきました。

吉野弘は、この散文詩の後半で

蜻蛉（かげろう）の雌を拡大鏡でみると口はまったく退化していて食物を摂れない。胃の中は空気ばかり。ところが腹の中には卵がぎっしり入っている。目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが、咽喉（のど）もとまでこみあげているように見える。

と謳っています。吉野弘は受身形で与えられた生を、自分の生として引き受けなければならぬと教えているのでしょう。

戦禍に思い致す夏……、8月は戦争で亡くなった人々の死を悲しみ追悼する月です。特に今年は戦後70年にあたり、戦争の惨禍を再び繰り返すことのないようにとの願いを込め、テレビや新聞等でも大きく取り上げていました。さらに4年前には、東北・関東沖で起きたM9.0という超巨大地震と津波で想像を絶する甚大な被害を受け、多くの尊い命が失われました。また、福島原子力発電所で起きた爆発事故の恐ろしさも忘れることはできません。

このような惨禍や災害に接すると人間の生命も蜻蛉のようにはかなく思えてしまいます。しかし、生きたくても生きられなかった人々の思いをどう共感すればよいのか？生きるとはどういうことか？今生きている私たち大人自らが、「生きている」ことに感謝し、「生きている」意味を十二分に考えて行動することが大切ではないかと思えます。そして、今ここに「生きている」子どもたちに、「この世に生まれてきたことがあなたの一ばんのよさなのだよ」と伝えていきたい……。戦後70年を迎え、戦禍に思い致す夏に考えたことです。